

「(仮称)立飛みどり地区プロジェクト」街区 名称は「(仮称)GREEN SPRINGS」

立川駅北側 約3.9万㎡の広大な敷地に新しい街区を開発

株式会社立飛ホールディングス

2018年3月1日 15時30分

241			...
いいね!	ツイート	はてな	画像DL
シェア			その他

株式会社立飛ホールディングス（本社：東京都立川市、代表取締役社長：村山正道）は、立川駅北側の「みどり地区」（東京都立川市緑町3-1外2筆）において計画中の「(仮称)立飛みどり地区プロジェクト」で開発される新しい街区の名称を「(仮称)GREEN SPRINGS(グリーンズプリングス)」といたしました。



本プレスリリースは、平成29年11月22日（水）の立飛プレスリリース（THD29-004号）に続く第二段の情報公開となります。

・「街区名称」

「(仮称)GREEN SPRINGS」

・「ネーミングの意図」

- ・ GREENは、「みどり地区」のアイデンティティ。また緑豊かな多摩立川の土地の魅力ストレートに表現。
- ・ SPRINGSは、「泉」=多摩川を中心に水に恵まれた豊かな土地柄と、街区内に設けられる水辺を表現。また、「春」の意味もあり、全体的に「健康」で心地よい街というイメージ。

・「開発計画の概要」

「(仮称)立飛みどり地区プロジェクト」は、多摩地区最大規模となる約2,500席（予定）のホール、新たに掘削する天然温泉を使ったインフィニティスパが特徴のホテル、商業施設、オフィス等で構成された、大規模複合開発プロジェクトです。

2020年以降、「心身ともに健康的で心地よい、人間らしい暮らしへのニーズ」が、ますます高まると考え、新

株式会社立飛ホールディングス

フォロー

フォローすると:

フォロワー(0)

URL <https://www.tachihi.co.jp>

業種 不動産業

本社所在地 東京都立川市栄町六丁目1番
立飛ビル3号館

電話番号 042-536-1111

代表者名 村山正道

上場 未上場

資本金 1500万円

検索

キーワードで検索

関連プレスリリース



輸送力2.5倍！河口湖・西湖
周遊バスに大型バスを導入

富士急行株式会社
19分前



パナソニックセンター大阪カ
民泊向け住空間展示をリニ
ーアル～空き家を活用し、

パナソニック株式会社
19分前



先進のハイブリッド無機塗料
「タテイルアルファ」が4タ
ブに進化を遂げて2018年6

プレマテックス株式会社
1時間前



インキュベーション施設
billage OSAKAで、SDGsを
テーマとしたセミナーが開催

株式会社MJE
16時間前



リライフプラス最新号は新運
載が続々。なかでも注目は、
「収納王子コジマジックの

株式会社扶桑社
17時間前

プレスリリース ランキング

いま話題

今日

今週



国内最大級のeスポーツイベ
ント『RAGE 2018 Summer』

しい街のコンセプトを「空と大地と人がつながる、ウェルビーイングタウン」に設定いたしました。

• «主な施設の紹介»



ホール <(仮称)TACHIKAWA STAGE GARDEN>

ホール <(仮称)TACHIKAWA STAGE GARDEN>

多摩地区初の民間大型ホールで、客席数は、多摩地区最大規模となる約2,500席（予定）として計画しています。

本ホールは、ホール内のステージと屋外の客席がつながる屋内外一体型ホールです。また、空へ飛び立つ滑走路をイメージするスロープで屋上に登ると、昭和記念公園から富士山までを一望することができ、圧倒的な解放感を味わえます。

なお、ネーミング策定に関して、単なるホールではなく、多様なコンテンツを発信していく次世代型のエンターテインメント施設という意味を含め、名称内に「ステージ」を盛り込みました。



ホテル <(仮称)SORANO HOTEL>

ホテル <(仮称)SORANO HOTEL>

全客室が50㎡以上・バルコニー付きで、客室から昭和記念公園の豊かな緑を一望できます。

街区内で掘削した天然温泉を使い、最上階にはルーフトップバーを併設したインフィニティスパ設け、更に、ホテル内には、街区コンセプトに基づいた緑に囲まれたガーデンレストランを設けます。

なお、ホテル名には、「空と大地と人がつながる、ウェルビーイングホテル」というコンセプトを踏まえ、「空」を感じ、開放的で心地よいホテルという意味を含めました。

にて世界初！?バーチャル…
株式会社CyberZ



ジラフ、ズボラのかえサービス「携帯かえるくん」をリリース、格安スマホの比較…
株式会社ジラフ



Amazon Prime Videoチャンネルを日本で提供開始、Amazonプライム会員はPriアマゾンジャパン合同会社



働くことに障害のある方へ付けた就職支援ガイドフリーパー版「LITALICO仕事ナ株式会社LITALICO



宝井理人によるキービジュアルが公開！高校ラグビーを描いた大型新連載『トライ…株式会社KADOKAWA



サッカー日本代表オフィシャルライセンスグッズに「ラライブ！サンシャイン!!」グ株式会社バンダイ



第22回全国高等学校女子硬式野球選手権大会をライブ中継株式会社朝日新聞社



Liverpool FC 2018/2019:ーズン ディープバイオレットのカラーを配したAWAY…株式会社ニューバランス ジャパン



JAL x 中央大学 連携協定を結
日本航空株式会社



人気のボトルに5地域のデザインが新登場！「コカ・コーラ」スリムボトル 地域デザ…日本コカ・コーラ株式会社

Facebookで人気のプレスリリ



人口約1,500人の岡山県西粟倉村が行う新たな資金調達 日本初、地方…岡山県西粟倉村



アプリコット・ベンチャーズ、約7億円の1号ファンド「Apricot Ventur…株式会社アプリコット・ベンチャーズ



日本初！阪神球団公式店舗はここだけ！虎で盛り上げられる酒場革命！『…アンドモフ株式会社



オフィス

オフィス

テナントごとに大型テラスを有し、屋内外での多様な働き方を提案するオフィス。「人」が「地域」と連携し、世界につながるワークフィールドを創出していきます。



商業施設

商業施設

多摩都市モノレール沿いの「サンサンロード」に面した約400mのショッピングストリートと、中央広場との連携を目指した店舗や、路面店のような開放感ある店舗等が特徴の約40店、約11,000㎡規模の商業施設です。

多摩地区の拠点都市としての都会的な暮らしの中に、自然や地域の魅力を取り込む新しいライフスタイルの提案を行う商業施設を目指します。



中央広場

中央広場

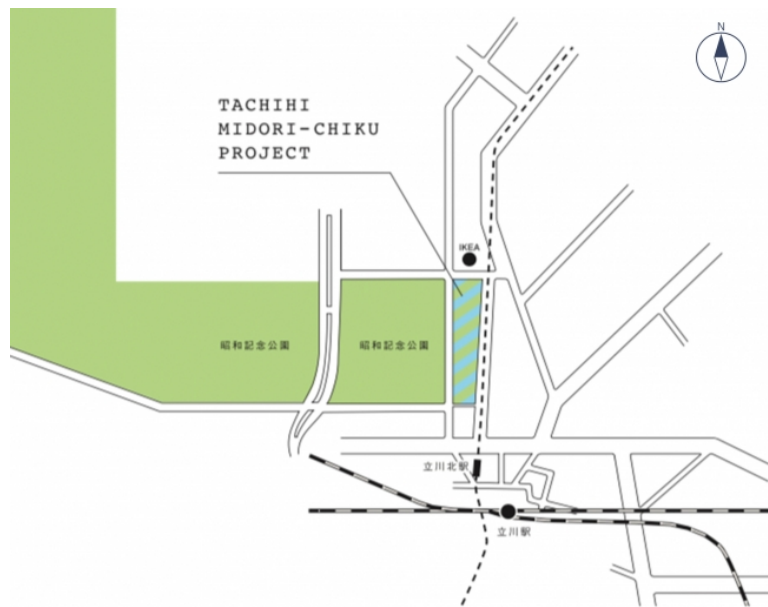
中央にある約10,000㎡の広大な広場は、緑豊かなランドスケープデザインとなっています。この広場は、オフィス利用者や来街者の憩いの場になる他、様々なイベントを実施して、人と街をつなげる重要な役割を果たします。

また、広場と南北に走る「X型」の通路で、ホール・ホテル・商業・オフィスを有機的に結び、健康的で心地よい体験があふれる街区を目指します。



• «敷地概要»

- ・ 事業名称：(仮称)立飛みどり地区プロジェクト
- ・ 事業主：株式会社立飛ホールディングス
- ・ 所在地：東京都立川市緑町3-1外2筆
- ・ 敷地面積：38,900.20㎡
- ・ 用途地域：商業地域
- ・ 建ぺい率：80%
- ・ 容積率：500%
- ・ 駐車場：約380台
- ・ 交通アクセス：JR中央線・立川駅より徒歩約8分、多摩都市モノレール・立川北駅より約4分



- «建物概要»

- ・ 建築面積 : 29,895.09㎡
- ・ 延べ面積 : 76,216.16㎡ (容積対象床面積 : 61,467.47㎡)
- ・ 容積率 : 158.02%
- ・ 構造 : 鉄骨造・鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・ 階数 : 地上11階・地下1階

ホール : 地上4階

A棟 (オフィス棟) : 地上9階

B棟 (オフィス・商業) : 地上7階・地下1階

C棟 (ホテル) : 地上11階・地下1階

C2棟 (商業) : 地上2階

D棟 (オフィス・商業) : 地上3階

E棟 (オフィス・商業) : 地上3階

F棟 (商業) : 地上3階

G棟 (商業) : 地上3階

- ・ 着工 : 2018年2月17日(土)

- ・ 開業 : 2020年春 (予定)

- ・ 設計 :

A-2地区 山下設計・大林組設計共同体 ※A棟を除く

A-3地区 株式会社山下設計

- ・ 施工 : 株式会社大林組 ※A棟を除く

- «計画地について»

株式会社立飛ホールディングスが平成27年2月に取得した約3.9万㎡の元国有地です。JR立川駅北口から徒歩8分の場所に位置し、目の前に広がる広大な国営昭和記念公園の緑が豊かなエリアで、約400mにわたりサンサンロードに面しています。

- «街区コンセプト»

「心身ともに健康的で心地よい、人間らしい暮らし」へのニーズが、2020年(平成32年)以降ますます顕在化していくであろうとの考えのもと、新しい街のコンセプトを「空と大地と人がつながる、ウェルビーイングタウン」に設定しました。「みどり地区」のある立川市は、都心への良好なアクセス性に加え、豊かな自然、アート、学術都市的な素地もあります。こうした資源を生かし、この地に「自然と文化が融合した、生命に心地よい街」を創ってきたいという願いがあります。2020年の先を見据え、これからの時代に求められる、新しい暮らし、豊かなライフスタイルを、立川から、日本中へ、そして世界へ発信していきたいと考えています。

- «立飛ホールディングスの取り組み»

当社は、大正13年に前進となる株式会社石川島飛行機製作所として創業、昭和5年に立川へ移転して以来、90年近くにわたり立川市を拠点としてビジネスを展開して参りました。現在の主力である不動産事業では、平成27年12月に、多摩都市モノレールの立飛駅前に大型商業施設「ららぽーと立川立飛」を開発。それ以来の大規模開発となる「(仮称)立飛みどり地区プロジェクト」では、立川市や周辺の事業者、近隣住民の皆様にも参画いただきながら、地元根ざした企業として、「みどり地区」及び周辺エリアの価値向上に貢献致します。

我々は、立川の持つ街のポテンシャルを踏まえ、2020年以降の都市のあり方を世界に向けて発信できるような街区を目指し、「みどり地区」開発に取り組んで参ります。

なお、「(仮称)立飛みどり地区プロジェクト」については、平成27年7月に設立した、株式会社立飛ストラテジーラボに担わせております。

- 【参考情報】立飛みどり地区プロジェクト 参画デザイナーチーム



清水 卓

【マスターデザイナー】 清水 卓 Taku Shimizu

株式会社スタジオタクシムズ

米国建築設計事務所出身。

東京ミッドタウンを初め複合施設等のチーフデザイナー。

代表実績：東京ミッドタウン、柏の葉ゲートスクエア、札幌赤れんがテラスなど



平賀 達也

【ランドスケープデザイナー】 平賀 達也 Tatsuya Hiraga

株式会社ランドスケープ・プラス

ランドスケープアーキテクト。

都市の中で自然とのつながりを感じられる空間づくりを実践。

代表実績：二子玉川ライズ、としまエコムーゼタウン、南池袋公園など



東海林 弘靖

【照明デザイナー】 東海林 弘靖 Hiroyasu Shoji

有限会社ライトデザイン

日本国際照明デザイナーズ協会専務理事。

著書に『日本の照明はまぶしすぎる』（角川書店）など。

代表実績：薬師寺食堂 内陣、二子玉川ライズ、象の鼻パークなど



井原 理安

【サインデザイナー】 井原 理安 Rian Ihara

有限会社井原理安デザイン事務所

東京ミッドタウン、二子玉川ライズなどの

再開発事業のサインコンサル、デザイン設計業務。

代表実績：東京都庁舎（第一・二本庁舎、議会棟）サイン改修計画、ザ・リッツ・カールトン京都 サインコンサル・デザイン設計、虎ノ門ヒルズ サイン計画など



グエナエル・ニコラ

【ホテル インテリアデザイナー】 グエナエル・ニコラ Gwenael Nicolas

株式会社キュリオシティ

フランス生まれ。キュリオシティ代表。

海外prestigeブランドの店舗デザインを多く手掛ける。

ギンザシックスの内装デザインも担当。

代表実績：ギンザシックス、ドルチェ&ガッバーナ 青山/ミラノ/ロンドン店、ジャン・ジョルジュ 東京、ドバイなど



小西 利行

【街区 コンセプト/PR】 小西 利行 Toshiyuki Konishi

株式会社POOL

コンセプト/ネーミング開発からデザイン・PRなどブランディング全般。

代表実績：サントリー「伊右衛門」、サントリー「ザ・プレミアム・モルツ」、SONY「PlayStation4」など

◎ このプレスリリースには、メディア関係者向けの情報があります。

メディア会員新規登録

無料

メディア会員ログイン

既に登録済みの方はこちら

メディア会員登録を行うと、企業担当者の連絡先や、イベント・記者会見の情報など様々な特記情報を閲覧できます。

※内容はプレスリリースにより異なります。

[プレスリリース](#) > [株式会社立飛ホールディングス](#) > 「(仮称)立飛みどり地区プロジェクト」街区 名称は「(仮称)GREEN SPRINGS」

プレスリリースファイル

種類 [その他](#)

ビジネスカテゴリ [建築・空間デザイン](#) [商業施設・オフィスビル](#)

キーワード [商業施設](#) [ホテル](#) [オフィス](#) [立飛ホールディングス](#) [立飛](#) [TACHIHI](#) [立川北側](#) [立飛みどり地区](#) [GREEN SPRINGS](#)

プレスリリース画像一覧

[画像を一括でダウンロード \(zipファイル\)](#)



ニュースリリース配信サービス

[PR TIMESとは](#)

[料金・プラン](#)

[プレスリリースを受信したい方へ](#)

[プレスリリースを配信したい方へ](#)

[ものしりプロジェクト](#)

[ログイン](#)

レコメンドサービス

[無料FAQならTayori](#)

[無料メールフォームならTayori](#)

[タスク・プロジェクト管理ツールのJooto](#)

[PR TIMES TV](#)

[PR TIMES LIVE](#)

[クリッピング](#)

[広告ならAdGang](#)

[無料占い・今週の運勢ならisuta](#)

[無料恋愛占いならisuta](#)

[ニュースならIRORIO](#)

PR TIMES公式SNS

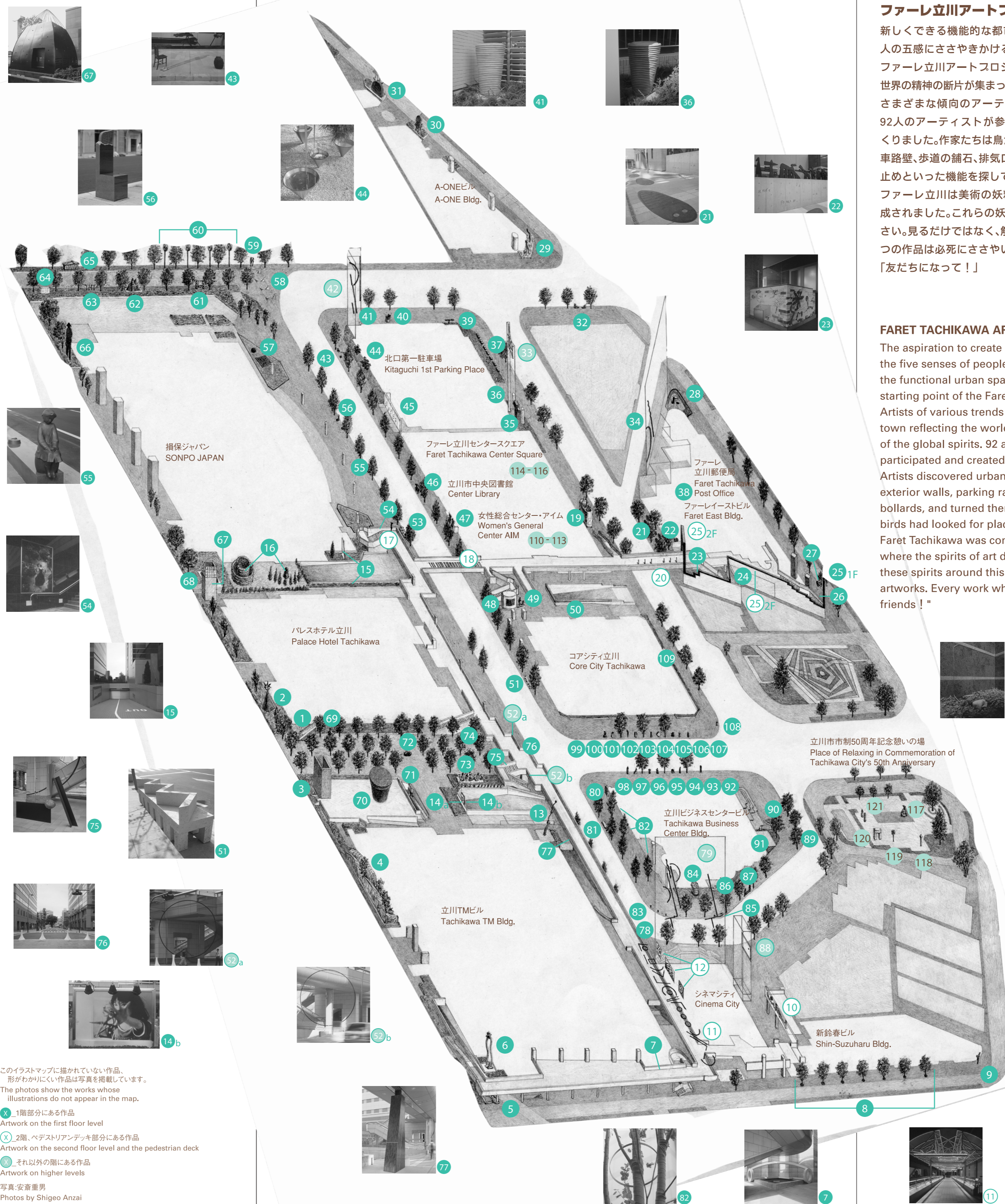
[公式Facebookページ](#)

[Facebookカテゴリー](#)

[公式Twitterページ](#)

[Twitterカテゴリー](#)

[Google+ページ](#)



このイラストマップに描かれていない作品、
形がわかりにくい作品は写真を掲載しています。
The photos show the works whose
illustrations do not appear in the map.

- ① 1階部分にある作品
Artwork on the first floor level
- ② 2階、ペデストリアンデッキ部分にある作品
Artwork on the second floor level and the pedestrian deck
- ③ それ以外の階にある作品
Artwork on higher levels

写真:安斎重男
Photos by Shigeo Anzai

ファーレ立川アートプロジェクト

新しくできる機能的な都市空間、そこで働き、訪れる人の五感にささやきかける空間をつくりたい。これがファーレ立川アートプロジェクトの出発点でした。世界の精神の断片が集まって世界を映す街になるべく、さまざまな傾向のアーティストに声をかけ、36カ国92人のアーティストが参加して109カ所に作品をつくりました。作家たちは鳥が棲み家を見つけるように、車路壁、歩道の舗石、排気口や点検口、サイン、照明、車止めといった機能を探して作品をつくったのです。ファーレ立川は美術の妖精たちの森になるように構成されました。これらの妖精を街のなかに探してください。見るだけでなく、触ってください。ひとつひとつの作品は必死にささやいています。「友だちになって！」

北川フラム
アートプランナー

FARET TACHIKAWA ART PROJECT

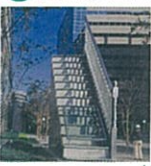
The aspiration to create a space whispering to the five senses of people who work in and visit the functional urban space to be built was the starting point of the Faret Tachikawa art plan. Artists of various trends were invited to make a town reflecting the world by gathering fragments of the global spirits. 92 artists from 36 countries participated and created artworks in 109 places. Artists discovered urban functions such as exterior walls, parking ramp walls, lightings and bollards, and turned them into artworks, as if birds had looked for places to build a nest. Faret Tachikawa was conceived to be a forest where the spirits of art dwell. Please look for these spirits around this town. See and feel the artworks. Every work whispers to you. "Be my friends!"

Fram Kitagawa
Art Planner



フアーレ立川の作品 1-109
Artworks in Faret Tachikawa 1-109

1 リチャード・ウィルソン イギリス 1953-
Richard Wilson UK 1953-



6200×5440×1500mm aluminum, stainless steel
共同出入口、排気口 entrance to the utility tunnel, vent
この階段の作品の下には地下の巨大な機械室に降りて行く本当の階段があります。なおかつこれはその地下の機械室の排気口にもなっています。階段はそのなかに隠された姿をも示しています。彫刻は典型的な英国式階段に似せてアルミニウムと鋼でつくられています。ウィルソンは奇想天外な方法によって現実の空間を歪ませる作家です。

2 新宮晋 日本 1937-
Susumu Shingu Japan 1937-



6770×4080×3400mm stainless steel, aluminum, corten steel
換気口 vent
新宮晋は動く彫刻をつくる作家です。地球の呼吸ともいえる風や、血液ともいえる水という、自然のなかで形になりにくいものを、金属の工芸品によって捉えようとしてきました。それは手品のような重宝の世界です。風や水という透明なものの存在を知らせるためにこれらの仕上げは微妙で精巧なものでなくてはなりません。そこに作家の力量があるのです。

3 チャールズ・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-



730×465×270mm bronze
水栓 Water Quiver
取水栓カバー water faucet cover
ウォーゼンはチューブを使った有機的な形をよく使います。今回つくった4つの取水栓のためのカバーはすべて植栽のなかにあります。植栽は街が存在する以前にあった自然の緑を思い起こさせます。音、人びとは水を井戸から汲み上げ、家で濁りながら使っていました。その器のような水が取水栓のカバーをつくらうと考えたのです。この器は、水を考える際に重要な、象徴的な意味をもっています。

4 岡崎乾二郎 日本 1955-
Kenjiro Okazaki Japan 1955-



4000×2500×4000mm steel
換気口 vent
この作品がつけられていた頃、それは造船所に横たわる船の骨格のようであり、シロナガス鯨のあばら骨のようでした。6個の換気口をおおって構造を、岡崎はコンピューターを使って美術作品に仕上げたのです。線にはいろいろな表情がありますが、この線は日本と西洋の文化的な落差をこえた普遍的な美術言語で語ろうと努力している日本作家の自己表現が見えるのです。

5 伊藤誠 日本 1955-
Makoto Ito Japan 1955-



3800×4800×4000mm steel
換気口 vent
伊藤誠がつくる作品はある面から見ると平面的ですが他の側から見るとまっすぐ通って見えるという空間です。今回のデパートの脇にあるペDESTリアンデッキ下のドライエリアは普通は自転車の置き場などになる場ですが、作家はここを逆に楽しい空間に変えてしまいました。建築上のデッドスペースは動物たちや子どもと同じようにアーティストにとってもライブスポットなのです。

6 袴田京太郎 日本 1963-
Kyotaro Hakamata Japan 1963-



17才 Seventeen
9000×1200×1200mm iron
換気口 vent
袴田京太郎の特色は開口部の不思議な造形です。それはいわば植物の食虫花のもつ一種あふげな魅力です。また同時に鉄を使いながら鉄を意図させない面白さがあります。彼の作品にはものをつくりはじめる前の「何にしようかな」というハラハラドキドキするようなときのときめきを感じられるのです。

7 伊藤誠 日本 1955-
Makoto Ito Japan 1955-



3000×9000×3000mm steel
換気口 vent
No.5を参照してください。

8 長瀬伸輝 日本 1960-
Nobuho Nagasawa Japan 1960-



トンボヒコーキのメッセージ
Dragonfly+Airplane+Dragonplane
1230×4mm (7 pieces total) cast iron
ツリサークル tree grates
長瀬伸輝は大地のなかで土を建物のようにもあがり野焼きした作品を以前つくりました。それ以来、つくられる場所のもっている特性や時間的なものにこだわってきています。この地域に幼い頃住んでいた記憶としてのトンボと日本で最初の飛行機があり、軍需の基地でもあった立川の歴史を組み合わせて、飛行機とトンボが変化していく形をつくったのです。

9 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardane Spain 1947-2004



タチカワの女たち
Tachikawa Women
2000×450×400mm steel
道祖神(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger)
エステルは意の外を所在なげに見て、何かを待っている女性をよく描きます。その女性たちが順に集まっているのは魚や月形のもので、それが何なのか聞いても教えてもらえませんでした。女性たちがいつも待っているだけなのと同じ女性である彼女には残念なのです。彫刻の形はシンボリックですが、確かなデザインに変えられた姿は美しい。犬は作家の大好きな動物です。

10 メナシェ・カディシマン イスラエル 1932-
Menashe Kadishman Israel 1932-



自然は微笑まず、人は微笑む
Nature does not smile, people do
2935×15000×12mm steel, lighting equipment
ペDESTリアンデッキ歩道 pedestrian deck wall
彼は主として鉄板を使った立体をつくりますが、それ以外の仕事のなかにも手がよく出てきます。半は人間の悲劇とともに歩んできた彼の反逆的な作品は、彼はユダヤ人、アラブとイスラエルの戦争の彫刻をテーマにしていることも多いのですが、そこには自分の出身や民族の範囲をこえた人間の悲しさが出ています。彼の仕事からは鉄がやわらかな素材だということが伝わってきます。

11 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926-
Stephen Antonacos Greece/USA 1926-



Ena-1
100mm×100mm×140mm stainless steel, neon tubes
パサージュ・ライティング canopy light
アントナコスはネオンという線と色をもつ素材を使って都市のなかに朝、昼、夕、夜と違った表情をつくりました。2才の時にギリシャからアメリカに渡った彼のネオンの作品からはどこかカラコンベ(地下基地)にかすかに光る灯のようなつましくもやわらかな表情が伝わってきます。彼のネオンは都会の夜に映くやさい花となりました。

12 トニー・クラッグ イギリス 1949-
Tony Cragg UK 1949-



セルタイプス、オーガネル、オーガニスム
Cell Types, Organelle(Cell groups), Organism
3800×2400mm, 3800×4800mm, 3800×2400mm fiberglass reinforced plastic, stainless steel
壁面レリーフ wall relief
クラッグは日常使われているものを、組みかえることでまったく思いつかなかった別のものにつくりあげた仕事をしてきました。車のつみ重ねは美しいパゴダの塔になりました。そのなかに一貫している造形上の特質は、有機的な形をもった開口部をつくることです。今回は作家にとっても新しい仕事で、生命の増殖のエネルギーをあらわしています。

13 田中徳太郎 日本 1940-
Shintaro Tanaka Japan 1940-



風の吹く場所
A Place Where the Wind Blows
8800×8000×4000mm bronze, stainless steel, corten steel
換気口 vent
田中徳太郎はドライエリアの上に鉄とステンレスの線によって飛翔する3つのプロズ製の球体を浮かせました。これはいつも微妙に揺れていて、それは3つの金属がささやかにふるえる声のように感じられるのです。作家の作品はいつも詩のような、あるいは言葉の発露、発生の瞬間のような飛翔の瞬間を定義しようとするまなざしによってできています。「風の吹く場所」です。

14 白井美穂 日本 1962-
Mio Shirai Japan 1962-



(a) 3600×2600×183mm, (b) 1700×2600×183mm stainless steel, processed graphic film sheet
車路壁看板 billboard on the parking ramp wall
「階段を降りてくる花嫁」とピカソの絵の前でこちらを「跳発する女性」。さらに「パーペルを持って坂道を登る女性」。これらが2カ所の3枚の看板の内容です。ここに彼女は受け身である現在の女性とそれとあがらうとする自分自身を映しています。白井美穂は小さなミニチュアをつくり、写真に撮って看板にするという方法を使います。

15 白川昌生 日本 1948-
Yoshio Shirakawa Japan 1948-



(a) 1900×4800×10mm, (b) 4040×1660×10mm galvanized steel
車路 parking ramp
白川昌生は地下に入る車路を使って仕事をすることになりました。そこで彼は、車路全体の平面図にある形を車路の壁に金属の切り抜きでつくりました。車路の壁にある種々のなかに立ってという作品をつくりました。建築上すでにできてしまった形をネガとポジでつくるといえる知的なゲームであり、見る人に発見の喜びを与えます。

16 モンティエン・ズンマー タイ 1953-2000
Montien Boonma Thailand 1953-2000



石鐘の庭
Rock Bell Garden
(a) H2560×5500×5mm, H3584×3200×5mm, (b) H2000×1500×5mm
bronze, granite, steel
庭園の石 garden sculpture
タイの作家であるズンマーは独自の文化をもった民族と、その文化の根となる仏教や伝統的な構築物が西洋的な空間と出会う場面の緊張感を作品にしています。彼はおのれの文化と西洋の文化との間で格闘しています。立川の仕事を始める時、彼の奥さんは死の床にありました。この作品が祈りの空間に思えます。

17 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardane Spain 1947-2004



タチカワの女たち
Tachikawa Women
2120×330×440mm steel
道祖神(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger)
No.9を参照してください。

18 坂口寛敏 日本 1949-
Hirotohi Sakaguchi Japan 1949-



バーコード・ブリッジ
Barcode Bridge
3400×20000mm ceramic tile
ペDESTリアンデッキ歩道 pedestrian deck
ペDESTリアンデッキのブリッジの上に貼ったタイルがバーコードになっています。これはもともとの建築予算だけでできた作品です。資本主義社会を端的にあらわすバーコード・ブリッジが一番面白いという論理に作家の遊びがあるのです。坂口は平面的な作品を主につくる人ですが逆逆法をのびをあげたり、道路に映る自分の影の変化を一日中描き続けたりする作家でもあるのです。

19 タン・ダ・ウ シンガポール 1943-
Tang Da Wu Singapore 1943-



最後の買い物
Last Shopping
3700×3450×1050mm fiberglass reinforced plastic, stainless steel
換気口 vent
タン・ダ・ウは社会の矛盾やそこにひそむ暴力性などを、日常品を使って表現してきた作家です。立川の換気口ではいろいろなことを考えました。スカートやまくりあげられたマリリン・モンロー像、壁にぶら下がったフライパン、醤油やおリーブやお酢などの7つの瓶、竹の葉で包まれるされたダンゴなどです。同じような案が、制限によってファイバーグラスになりました。

20 牛島進治 日本 1958-
Tatsuji Ushijima Japan 1958-



古典的な通信機器、伝声管
Classical Communicating Instrument, Speaking Tube
H1500×50.8×mm (6 pieces total) stainless steel
オブジェ object
牛島進治は無用の機械をつくることに喜びを見いだしている作家です。ただ回り続けを精しく機械、石をひくだけの機械など。しかしそこにはいつも精神のふるえがあるのです。心もふるえない技術は目的に向かっていた合理的な解決をもとめるのですが、そこに行かないことによって彼の作品は心のふるえをもち続けるのだといえます。「風の音は何色?」と伝声管はきいていきます。

21 大増オスカル幸男 ブラジル/日本 1965-
Oscar Satio Oiwa Brazil/Japan 1965-



40×900×2500mm (10 pieces total) cast iron, bronze
舗装材 paving material
オスカルは日系2世のブラジル人で、建築家として日本に生まれましたが、今は美術の仕事をしています。ですから彼の背景には都市が画面のようなものとして横たわっているようです。都市にユーモアのある風穴を開けようとする作品をつくるのが特徴です。ここでは本古の首、立川にいたかもしれない三葉虫やゾウムシのような大きな魚を舗装に浮かび上がらせました。

22 ナディム・カラム レバノン 1957-
Nadim Karam Lebanon 1957-



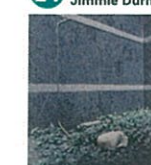
2470×5545×1695mm steel
機械出入口 opening loading entrance
ソウ、キリン、山猫などのシルエットは古代の行列です。それは古代と現代が一緒になったメルヘンで、影絵のような世界です。彼は日本で建築の勉強をしつつ作家活動をした人で、お水取りなど日本の空間と儀式に興味をもっています。アラブと日本には東洋的なつながりがあり、それがあるなつかしさを呼び起こすようです。

23 トニー・バーラント アメリカ 1941-
Tony Berlant USA 1941-



1443×2190×2100mm metal
換気口、給油口 vent, oil tap
バーラントはこの場所です仕事をすることを喜びました。少し暗く、給油口もあるドライエリアの壁は、普通そんなに言われません。しかし、彼はここを潤滑のなかの聖なる泉のように感じました。ここで作家は金属の断片を貼り合わせて彼の内的な世界を描いています。彼はアメリカ先住民の美しい織物の蒐集と研究を行っています。そのような関心もわかる気もします。

24 ジミー・ダーハム アメリカ 1940-
Jimmie Durham USA 1940-



ガラガラヘビ星と7つの方位
The Rattlesnake Star and the Seven Directions
20m(rope)stainless wire, stone
植栽内オブジェ object in shrubbery
ダーハムはアメリカの先住民チエロキーの出身です。立川に来た時、彼は基地跡の雰囲気を感じたこの場所を感慨深げに歩きました。青年の頃、兵役で日本に滞在したそうです。チエロキーには東、西、南、北、上、下、内面、という7つの角があるそうです。彼は民族の記憶をこの都市のなかにひとつの出会いとして設置したのです。

25 柳健司 日本 1961-
Kenji Yanagi Japan 1961-



3700×3700×1200mm stainless steel, neon tubes
空木 gate
このゲート(空木)は一番早い時期に建築物として建てられました。古い建物と新しい建物の間にある暗く狭いどらまのスペースは建築的処理ではなかなか難しく、ここはアーティストの発案です。ふたつの赤い門とそれをつなぐ赤い鉄、夕方以降ぼんやり光る紫色のネオンの壁は魅力的な空間をつくりだしました。

26 PHスタジオ 日本 1984結成
PH Studio Japan 1984-



ウォーターマーク(水標)
Watermark
2070×2055×1100mm stone, acrylic sheet, lighting equipment
道徳水栓カバー fire hose box
PHスタジオは建築の魅力を美術という広い抽象的世界にとりこみ、また美術というパーソナルな声の部分を建築の世界にとりこもうとしているグループです。「社会に機能しているものが美術になりえるか?」という問いをテーマにしています。以前彼らは捨ててある椅子を解体し、つなぎあわせ色を塗って、もとの椅子よりずっと美しい椅子をつくったこともあるのです。

27 ゲオルギー・チャスカノフ ブルガリア 1934-
Georgi Tchapkanov Bulgaria 1934-



1560×300×1050mm steel
道祖神(見知らぬ人) guardian deity figure (animal in Tachikawa-horse)
彼はいつもデッサンをしています。そのドローイングはスピードがあっけいさきさきしています。肖像彫刻も得意ですが、今回は立川の鉄屑屋さんをまわって、昔使われた農具の残骸を集めてきました。耕転機の羽根は羊の角だと、材料を見ながらどういふ動物をつくるか考えていくのでした。しかし機械はとがっていたりするので、街の中に置くために安全にするのが一工夫でした。

28 クレス・オルデンバーグ スウェーデン/アメリカ 1929-
Claes Oldenburg Sweden/USA 1929-



リップスティック
Lipstick with Stroke Attached(to M.M.)
2070×3900×3100mm metal
オブジェ object
金属板に色を塗っただけのリップスティック(口紅)。それは20世紀の都市文明の象徴のようなものでも、オルデンバーグはよく知られた日用品をキャンパスや都市のなかに突然もちこみ、そのものとその背景を新鮮に見せてきた作家です。それにしてこのリップスティックはその鮮やかな赤い色をもって永遠の若々しさとみずみずしさを自己主張しているように見えます。

29 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albardane Spain 1947-2004



タチカワの女たち
Tachikawa Women
(a) 2490×1400×250mm, (b) 2450×570×430mm steel
道祖神(見知らぬ人) guardian deity figure (strangers)
No.9を参照してください。

30 パトリック・ヴィレール ハイチ 1941-
Patrick Vilaire Haiti 1941-



人間掛け椅子
Human Armchair
2445×900×900mm iron
植栽内オブジェ object in shrubbery
この人間掛け椅子は、権力のシンボルだという考えから生まれています。いわば人間が人間に屈服するための王座なのです。彼は鉄を使って彫刻それ自体が神話や民間伝説のなかにある奥深い意味をあらわすことができると考えています。この椅子を見ていて椅子が椅子であるだけでなく、権力者であり、また神話的世界の王者であるかのように見えてくるのです。

31 関安孝昌 日本 1957-
Takamasu Kuniyasu Japan 1957-



スタックインフレーム
Stack in Frame
2660×3000×720mm brick, aluminum, steel
ゴミ集積所ゲート waste disposal site
関安孝昌は、レンガと木をつかった構築物をつくります。それはあかたも、古い築地の構造があらわになつたふうに見えるのです。土と木という素朴な材質がもつ単純さと現代風の構築性が魅力になっているのですが、今回はゴミ集積所が永久に設置されるものなので、鉄とプロズの木とレンガでゲートをつくったのです。「自立した木。主張しないこと。普通であること」がテーマです。

32 関根伸夫 日本 1942-
Nobuo Sekine Japan 1942-



対話のボラード
Dialogue Bollards
900×1000×300mm (2 pieces total) granite
車止め bollards
関根伸夫はアートを環境のなかに活かそうと仕事をしてきたパイオニアです。アートがギャラリーや美術館のなかに納まるものではなく、都市の空間のなかで息づくこと、素朴な土をヨーロッパを歩いて感じたといいます。日本でも奈良、平安、鎌倉時代に彫刻が、桃山時代に障壁画が建築と結びついて盛んになりました。彼は美術の現代における可能性を探求しているのです。

33 江上計太 日本 1951-
Keita Egami Japan 1951-
13000×6500mm stainless wire
サインサイン
江上計太は仕切られた形(グリッド)の組み合わせによる仕事をします。ここではふたつの作品、換気塔の天蓋と、ビルのつべんのワイヤーによるクモの巣をつくりました。金属の線の裏に見える青空は、時に無限に広がる青空よりも一層青い色を想像させることができます。彼の作品は仕切ることによってより想像力をはたかせる日本古来の哲学に似ているともいえるようです。

34 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926-
Stephen Antonakos Greece/USA 1926-
Tria-3
150mm×150mm×43m stainless steel, neon tubes
壁面照明サイン illuminated sign
No.11を参照してください。

35 スタシス・エイドリグヴィチウス リトアニア/ポーランド 1949-
Stasys Eidrigevičius Lithuania/Poland 1949-
顔一車
Face-Car
2500×1780×839mm corten steel, stainless steel
植栽内サイン sign in shrubbery
スタシスは絵本作家として有名ですが、芝居の演出など多方面で活躍をしています。彼の仕事には仮面が出てきます。仮面は神々との交流から生まれたものですが、人を驚かすと同時に人が新しい世界に入っていく時に必要な(勇氣の代わりになる)ものでした。スタシスはリトアニアの出身で今はポーランドに住んでいますが、人生の経緯が作品と深く結びついているようです。

36 チャールス・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-
水瓶
Water Quiver
730×465×270mm bronze
取水栓カバー water faucet cover
No.3を参照してください。

37 ドナルド・ジャッド アメリカ 1928-1994
Donald Judd USA 1928-1994
500×1000×500mm (7 pieces total) corten steel, iron
彫刻別 wall sculpture
ジャッドは物質のもつ本質を極限までつきつめようとした作家です。シンプルながらも美しい。ジャッドは立川の仕事を痛感で用意はじめ、1994年2月12日に亡くなりました。建築の条件が変化するために、ジャッドが当初設置を考えていた壁がなく、そのため新たな壁を用意しなくてはならなくなりました。これはジャッドの遺作となります。

38 フェリーチェ・ヴァリーニ スイス/フランス 1952-
Felice Varini Switzerland/France 1952-
屋上の円
Top Circle
acrylic paint
ペントハウスサイン penthouse sign
ヴァリーニは複雑な空間を選んでそこに色を塗るのです。ギザギザであったり直線であったり、切れていたり。しかし、それらの色が塗られた線は、ある1点から見るひとつの真円になっている。その驚きをつくり出す。円に見えるのはただ1点だけではありません。空間の構造の不思議さを教えてくれるのです。この円は都市にある秘密の暗号ともいえるようです。

39 パブロ・レイノス アルゼンチン/フランス 1955-
Pablo Reinoso Argentina/France 1955-
ジャガイモを収穫する人
The Potato Harvester
1200×2350×300mm bronze
植栽内オブジェ object in shrubbery
レイノスの作品は芽生えばかりの植物のようです。右側のスプーンの部分にジャガイモをのせ、こぼれたジャガイモが足もとに広がるという考えは、人間の生活がそこそこの美術もあるのだと気付かせてくれます。「自分が彫刻したこの彫(さじ)に、私はまた同時に、私の子どもに初めて食物を与えたこと、死の床にある父に最後の食べ物を与えたことへの、素朴な賛歌を見るのです。」

40 篠原有司男 日本 1932-
Ushio Shinohara Japan 1932-
ケンタウルス・モーターサイクル
Centaur Motorcycle
1550×1200×780mm bronze
植栽内サイン sign in shrubbery
これはカエルが乗ったオートバイクのお化け、オートバイクの神様です。篠原有司男は気合で生き、気合で仕事をしてきた作家で、その面がその作品にもあらわれています。車輪やチェーンやスポークの形が見るとはいえ、全体にあるのは作家の手が触った粘度のぐにぐにとしたかたまりの連続的なものです。握った形ができていく時の体験、それは彫刻の発点かもしれませぬ。

41 チャールス・ウォーゼン アメリカ 1958-
Charles Worthen USA 1958-
水瓶
Water Quiver
730×465×270mm bronze
取水栓カバー water faucet cover
No.3を参照してください。

42 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926-
Stephen Antonakos Greece/USA 1926-
Tessera-4
100mm×100mm×45m stainless steel, neon tubes
壁面照明サイン illuminated sign
No.11を参照してください。

43 ホセイン・ヴァラマネシュ イラン/オーストラリア 1949-
Hossein Valamanesh Iran/Australia 1949-
きみはただここにすわっていて。
ぼくが見張っていてあげるから
You just sit here, I will keep my eyes open
1100×3100×2490mm bronze, granite
車止め bollards
ヴァラマネシュは日常の空間のなかに、思いもかけない空間をつくりあげる作家です。今回の作品はふたつの車止めという条件を守りながら、自分が使っている椅子と本をブロンズの車止めにし、自分の影を踏道にすりこみました。彼自身の日常を日本の公共空間のなかに突然登場させたのです。それは美術だけに可能な異空間の出現なのです。

44 レベッカ・ホーン ドイツ 1944-
Rebecca Horn Germany 1944-
禪庭のためのエネルギー・バロメーター
Energy Barometer for a Zen Garden
stainless steel, glass
植栽内オブジェ object in shrubbery
ホーンは若い頃からいろいろなパフォーマンスを行って来ました。簡単な機械を使った作品をつくることが多く、それらの変わった動きは文明に対しての鋭い批判となっています。立川では2本の松を植えました。松と金属棒とじょうごが連環し、大地と水と植物を自然のエネルギーが循環するという作品です。それは新しい土地を再生する力のシンボルになっているのです。

45 マリーナ・アブラモヴィッチ 旧ユーゴスラビア/オランダ 1946-
Marina Abramović former Yugoslavia/The Netherlands 1946-
黒い竜一家族用
Black Dragon for family use
105×190×110mm (15 pieces total) crystal
機械出入口 equipment loading entrance
アブラモヴィッチは長い間いろいろなパフォーマンスをしてきました。現代の美術は人間の身体や動作も含めたすべてにより、新しい知覚を呼び起こそうとします。彼女は以前、一緒に仕事をしてきた男性と中国の万里の長城の両端から歩いてきて出会う、そのまま現実に永遠に別れるパフォーマンスをしました。立川ではブラジル産の水晶に頭、胸、性器をあてて瞑想する壁をつくりました。

46 ゲオルギー・チャスカノフ ブルガリア 1934-
Georgi Tchapkanov Bulgaria 1934-
1350×1100×600mm steel
道祖神(立川の動物たち-羊-) guardian deity figure(animal in Tachikawa-sheep)
No.27を参照してください。

47 彦坂尚喜 日本 1946-
Naoyoshi Hikosaka Japan 1946-
赤い作品「母と子を殺した父親のようなもの」、
青い作品「父親に殺された子を受精させた父親のようなもの」
Red work "Like a Father Who Has Killed His Wife and Child",
Blue work "Like a Father Who Fertilized the Child He Had Killed"
(R)2800×1400×310mm, (B)2800×1500×310mm steel
換気口 vent
彦坂尚喜は美術学生の時から美術と、それを囲む社会について鋭く考えてきた人です。この換気口では全体をつくらうとしたが、制限が多く、その制限のなかで換気口の高さについてこだわるとしたそうです。その結果できた馬の鞍のような形は道路側からも建物側からも見て面白いものになりました。

48 牛波/ニューボ 中国 1960-
Niu Bo China 1960-
標的の裏側
The Reverse Side of a Target
(a)1630×4545mm, (b)2400×2710mm aluminum
換気塔 ventilation tower
彼はこの時代、芸術表現はやり尽くされてしまったと考えます。ゼロからの出発のために、宇宙時代のアートとして、大空に飛行機の排気によって描かれる大空絵画や、無重力空間のなかで美術活動を行なう無重力絵画を始めました。ここでは20世紀美術の代表的なふたつの作品、ジャスパー・ジョーンズとルー・ジョーフォングタのパロディによって自分の立場を表明しているのです。

49 ウスマン・ソウ セネガル 1935-
Ousmane Sow Senegal 1935-
倒れた人
The Fallen
(a)11800mm, (b)1050mm iron, mixed media
植栽内オブジェ object in shrubbery (strangers)
最初にソウに会った時、彼が見ていた本に、アフリカの人達を描いたスケッチが載っていて、それを見る時の彼の顔は実に嬉しそう、これは〇〇族だ、これは△△族だといつて話をしてくれました。彼はまた家族の写実的な彫像を、世界の都市と美術館に置いていきます。今回の材料はいわば日本の古い乾燥像のようなものですが、ソウに言わせると屋外でも大丈夫な彼の工夫によるものです。

50 ジョセフ・コスース アメリカ 1945-
Joseph Kosuth USA 1945-
祝文、ノエマのために(テキスト:石牟礼道子「椿の海の記」、
ジューズ・ジョイス「若い芸術家の肖像」)
Words of a Spell, for Nôema (Text from Michiko Ishimure:
Story of the Sea Camellias and James Joyce:
A Portrait of the Artist as a Young Man)
430×41700×70mm neon tubes, slate, steel
車路壁 parking ramp wall
今までの芸術は視覚芸術でしかなくという反省から、芸術の存在理由を問うという考え自体を芸術にする傾向が現れました。コスースは視覚的な束縛のなかから美術に、新しい広がりをもたらしました。石に彫られたふたつのテキストの交錯する対比は、見る者がどう考えるかで複雑な意味をもちはじめます。

51 依田久仁夫 日本 1949-
Kunio Yoda Japan 1949-
690×2700×600mm ceramic
車止め(ベンチ) bollard (bench)
依田久仁夫はできる限り少ない土を使って作品をつくらうとしています。ですから普段の作品は光を通すほど薄いものです。彼にとって土という材料は紙や木に近いやわらかなものになっています。今回のように即中の人が座るベンチという場所は彼のいつもの仕事とはあまりにも違いますが、ギリギリのかた目で彼の考えを活かして美しいベンチをつくりました。

52 フェリーチェ・ヴァリーニ スイス/フランス 1952-
Felice Varini Switzerland/France 1952-
背中あわせの円
Circles Back to Back
acrylic paint
ペDESTリアンデッキサイン pedestrian deck sign
No.38を参照してください。

53 依田久仁夫+エステル・アルバルダネ 日本/スペイン
Kunio Yoda+Esther Albandané Japan/Spain
690×4050×600mm (bench) ceramic, steel
車止め(ベンチ), 道祖神(見知らぬ人) bollard (benchi), guardian deity figure (stranger)
エステル・アルバルダネ:No.9を参照してください。
依田久仁夫:No.51を参照してください。

54 白井美穂 日本 1962-
Mio Shirai Japan 1962-
2298×1636×80mm stainless steel, processed graphic film sheet
ペDESTリアンデッキ看板 billboard on the pedestrian deck
No.14を参照してください。

55 山本正道 日本 1941-
Masamichi Yamamoto Japan 1941-
1180×2450×400mm bronze, granite
車止め(ベンチ) bollard (bench)
山本正道は石とブロンズを丁寧に組み合わせ仕事をしますが、同時に風景そのものが彫刻になるような仕事もしています。彼の作品からは、時代を超えてこだわり続ける人間への関心が彫刻の本質に通るものだという考えが伝わってきます。夢を追い、ふくらませ自分の心のなかの世界をあらわすという彫刻家の考え方がわかる作品です。

56 深井隆 日本 1951-
Takashi Fukai Japan 1951-
1200×350×450mm (2 pieces total) black granite
車止め(ベンチ) bollards (benches)
深井隆は木彫りの作家です。そこには五感のはたかきがあって、木を神々しいものにしてしまいます。彼は日本古来の木の彫りの魅力を現代に新しい感覚で呼び起こそうとしているかのようです。今回は車止めという設定でした。彼はこう言います。「美しい空間や環境は人をよりやさしくします。できれば私の作品もその空間に黄や赤を奏でるひとつでありたい。」

57 片瀬和夫 日本 1947-
Kazuo Katase Japan 1947-
星座又は星の宿
Constellation, or Star Shelter
(a)1200mm, (b)150×3600×3600mm basalt, ceramic
植栽内オブジェ object in shrubbery
片瀬和夫はできる限り簡略化した形といわば禅のような思想をともに作品にとりこむことで、見る側の精神の広がりをとらうとしているようです。ここではインド産の玄武岩の球体と日本産瓦の対比です。球にはひとつの星が、瓦にはブラジル国旗にある27個の星が刻まれています。ここには世界共通の神話に対する郷愁があるようです。

58 箕原真 日本 1959-
Shin Minohara Japan 1959-
人の球による空間ゲート
Spatial Gate Made of Human Spheres
(a)/(c)1200×852×810mm, (b)1020×852×810mm, (d)840×852×810mm aluminum
車止め bollards
箕原真は建築家です。ここは歩行者専用でありながら、時には緊急車両が入りうる移動可能な車止めを2カ所で作りました。球体の放散を立体と置でつくりながら、その球体を感じさせる装置です。それを作家は球空間による「空間のモデル」と呼んでいます。車中心の都市の機構を人間中心のものへと変えていく契機があるような車止めが登場したので。

59 エステル・アルバルダネ スペイン 1947-2004
Esther Albandané Spain 1947-2004
タチカワの女たち
Tachikawa Women
2250×930×640mm (2 pieces total) steel
道祖神(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger)
No.9を参照してください。

60 イーエフペー フランス 1984結成-1995解散
IFP France 1984-1995
4950×900×350mm (4 pieces total) stainless steel, acrylic sheet,
lighting equipment
街灯 street lamp
IFPは、グループの名前です。アートは作家に属するものではないという考えによって、はじめは従来のアートの考え方を覆えるような仕事、たとえばシンボリズムまでをアートとするようなことでデビューをしました。ここ立川では、夜の闇にあたって青空に浮かんでいるというような視覚的な美しさを重視し、環境や建築空間などの調和を追求した照明作品をつくりました。

61 アレシュ・ヴェゼリー チェコ共和国 1935-
Aleš Veselý Czech Republic 1935-
ダブルベンチ
Double Bench
2200×2400×700mm iron, granite, stainless steel
ベンチ bench
ヴェゼリーは石や鉄など力強いものの衝突によって、より以上の力がありかを示そうとする仕事をしました。それはしばしば物理学の実験のような緊張した美しさをあらわします。彼はこの仕事のために100個もディテールを考えたそうです。ディテールは決定的な形をわかちまわす鍵です。それらを見る作家と作品の内面と構造が、形体ともわかちまわすのです。

62 アニッシュ・カプーア インド/イギリス 1954-
Anish Kapoor India/UK 1954-
山
Mountain
2500×4500×2300mm iron
植栽内オブジェ object in shrubbery
空間は形ある物質によってつくられるだけでなく、その形からつくりだす形以外の無空間によって構成されます。カプーアは立体による新しい空間をつくりだしてきた作家です。欧米型の物質の量感をもとにしたり、空間の均質化にもとづいた構築的な空間ではなく、いわばアジア的な自然と精神の広がりをもちながらも、素材そのものの形や性質を大切に空間をつくり出します。

63 藤本由紀夫 日本 1950-
Yukio Fujimoto Japan 1950-
耳の椅子
Ears with Chair
1150×2500×500mm stainless steel
ベンチ bench
藤本由紀夫は音の装置をつくる作家です。ここでは直径6cmのパイプを耳耳にあてて、目に見えない空気の流れを聞くための装置です。街目に見えるものだけではなく、それ以上に目に見えないものでできています。騒々しい時でも、静かな時でもその環境が音はパイプを通して耳に達します。その時パイプの共振によって独特の鳴りをもった音になるのです。

64 ウルリッヒ・リュッククリーム ドイツ 1938-
Ulrich Rückriem Germany 1938-
1500×2500×500mm granite
植栽内オブジェ object in shrubbery
リュッククリームは切断する以前の石のもつ形態と性質をそのまま活かしながら、石がもつあまり知られていないやわらかさや透明感を美しい形に形をきし示す作家です。彼は切断した石を鉄でつないだりしません。自重によって石は安定するのです。今回は安全上、鉄で上下の石をつなぎましたが、彼は不満でした。石と対話する作家は石のことを法律家よりもよく知っているのです。

65 川俣正 日本 1953-
Tadashi Kawamata Japan 1953-
3365×5525×1215mm galvanized steel, steel
倉庫 storage
川俣正は古い建物を廃材で囲む、水辺に小屋をつくるなど、幻滅的ともいえる空間を風景のなかにつくってきた作家です。物置きを街中に見たりもします。彼は街を歩き、街や建物に隠された記憶や意味を、木の断片や小屋の設置によって新しく見せようとするのです。街というキャンパスに描かれた美しい線が、都市と時間とがもつ激しくなつかしい関係性を知らせてくれるのです。

66 ジョナサン・ボロフスキー アメリカ 1942- Jonathan Borofsky USA 1942-

フリーケースをもった男 Man with Briefcase 8120x2340x64mm steel 道徳神(見知らぬ人) guardian deity figure (stranger) ボロフスキーはずっと自分自身の姿をつくってきました。この鉄の労働者も自分が描いたデッサンをつめたフリーケースを持っている作家自身です。足もとの数字は作家自身が埋めた時間の経過をあらわしています。この社会のなかの自分をあらわさない日常のなかでカウントすることが人間の孤独な存在を表現しているように、この像はこの地域で働く人の姿にも見え、共感を呼びます。

67 青木野枝 日本 1958- Noe Aoki Japan 1958-

4570x3700x3700mm steel, urethane paint 換気塔 ventilation tower 鉄は本来硬く構築的な素材ですが、青木野枝はやわらかくて不安定なあやうさをもった鉄の個性を見せようとしてきました。それは現代社会の感覚につながります。例えば不安という感情は鉄にはないし、不安という感情は目には見えませんが、確かな感覚として感じられます。この見えぬ感覚がつけられた形や色から伝わってくるように、この像は鉄の個性と青木野枝の個性が作家の個性が作家を現代の精神の記録者とするのです。

68 宮島達男 日本 1957- Tatsuo Miyajima Japan 1957-

3600x3590mm x2 sides, (3600x1770mm) x2 sides LED, plastic 換気塔 ventilation tower 宮島達男は無限に点滅する数字を使う作家で、それは美術が時間と深く結びついていることを教えてくれます。「私の時計は、ばらばらの時間、144個から構成される。それはデジタルな数字で1〜9までカウントし、また1に戻って繰り返す。そして"0"は表記されない。カウントするリズムは1/10秒の速いものもある、10時間にひとつしか進まない非常に遅いリズムのものもある。」

69 マーティン・キッペンベルガー ドイツ 1953-1997 Martin Kippenberger Germany 1953-1997

2350x1800x500mm aluminum, glass, lighting equipment 街灯 streetlamp 彼は美術がどういふものであるべきだとか、どんな役割をもつべきだとかいう規範とはまったく別のところで作品をつくろうとしています。彼にとってスタイルとは作家の個性のありかであり、行動と決意によって達成されるものなのです。むしろ彼は人にこう言ってもらいたい。「キッペンベルガーはいい奴才だったよ」と、これは悪い文明のなかで悪い子になった彼自身にサンタクロースが怒っている作品です。

70 ジャン=ピエール・レイノー フランス 1939- Jean-Pierre Raynaud France 1939-

5000x5470x6mm (objet) aluminum, steel stone オープン・カフェテラス open cafe レイノーは単純化した物体や環境をつくります。彼は以前、四角の白いタイルだけでできた家をつくって、そこに25年住みました。その家は全体が作品であって、その白さを伝えるために家で火を使った調理はせず、食事はいつも外食でした。アパートのオープン・カフェテラス全体を赤い植木鉢と自然石でつくった絵物の庭もそういう考えの延長にあります。

71 ロバート・ラウシェンバーク アメリカ 1925- Robert Rauschenberg USA 1925-

自転車もどき VI Bicycle VI 1560x1830x710mm bicycle, neon tubes, glass, H-shape steel 自転車のネオンサイン neon sign for a bicycle parking lot ラウシェンバークは反アバルトヘイトやエイズをなくすための運動に深くかかわり、作品においても社会的な問題を扱ってきました。その材料には、絵の具などと一緒には新聞紙のような日常の道具が使われ、彼の作品においては社会と美術が同じ線にあるかのようです。今回は普段使っている自転車のネオンをつけて面白くしたものを、駐輪場のサインとして使ったのです。

72 ニキ・ド・サンファル フランス 1930-2002 Niki de Saint Phalle France 1930-2002

会話 The Conversation 1040x1620x1240mm fiberglass reinforced plastic ベンチ bench ニキは原色を使ったやわらかな形で生命の力をつたいあげる作家です。そこでは女性や花や蛇や首が、赤、白、青、紫、緑、黄などの色とともに、実に楽しく子どものように、はじけるような充実した動きをします。そういえば昔の日本の仏像が、女性にふくよかさを基本にしつつ、指やかいなどのディテールは子どもをモデルにしていたことを思い出します。

73 サンデー・ジャック・アクパン ナイジェリア 1940頃 Sunday Jack Akpan Nigeria ca.1940-

2000x1000x800mm (7 pieces total), 1600x700x800mm (7 pieces total) concrete オブジェ(見知らぬ人) objects (strangers) アクパンの村では、村人それぞれがいばら素晴らしい姿の肖像を注文しに彼のところに行きます。普通は正装の姿を、サッカー選手ならボールを蹴った瞬間を頼むのです。それはやがて注文主が死んだ時にお墓に建てられます。そのつくり方がまた面白い。砂で型をつくりコンクリートを流し込み顔と背中を張り合わせその後に着色するのです。立川ではナイジェリアの首長が勢揃いしています。

74 山口啓介 日本 1962- Keisuke Yamaguchi Japan 1962-

Tachikawa Box 2590x1780x600mm steel, glass, acrylic sheet, lighting equipment ペDESTリアンデッキ壁面サイン sign on the wall of pedestrian deck post 山口啓介は銅版画の作家ですが、今回は案内板を作りました。この案内板は3重になっていて1層目はファール立川の現在、2層目は開発前(1989)の街、そして最後の地下層には昔生えていた植物のプレパレートがその街の記憶を伝えます。照明も入っていて楽しいものになっています。

75 植松聖二 日本 1949- Keiji Uematsu Japan 1949-

浮かち赤/垂 Floating Form-Red/Vertical 2300x2900x400mm stone, steel, stainless steel オブジェ object 植松聖二は真鍮の材料の形態とボリューム、線、色を使って空間の安定と崩壊の境目に成立する緊張した作品をつくりだす作家です。ここでは丸い自然石と真鍮の円筒状の鉄棒と鉄板という4つの要素が力学的にも色彩的にも劇的なコントラストに関係している作品をつくりました。重力や引力、エネルギーといったものは地球という場への興味から来ているような気がします。

76 箕原真 日本 1959- Shin Minohara Japan 1959-

人の球による空間ゲート Spatial Gate Made of Human Spheres (a)/(c)1000x1002x780mm, (b)/(d)1250x1002x930mm aluminum 車止め bollards No.58を参照してください。

77 市橋太郎 日本 1940- Taro Ichihashi Japan 1940-

3973x1531x658mm aluminum ペDESTリアンデッキ支柱 pedestrian deck post 市橋太郎は変形したキャンバスに描く作家です。ここではペDESTリアンデッキの連続した円柱のひたひたが構造的な理由で不定形になったものを作品にすることになりました。完全さを予測できるものでありながら完全ではありえなかった形の不安があるわけです。しかしその不完全な個性にこそひとつの美術的価値になる自由と発見をもったといえるのです。

78 ゲオルギー・チャスカノフ ブルガリア 1934- Georgi Tchapkanov Bulgaria 1934-

530x1370x580mm steel 道徳神(立川の動物たち) guardian deity figure (animal in Tachikawa-dog) No.27を参照してください。

79 スティーヴン・アントナコス ギリシャ/アメリカ 1926- Stephen Antonakos Greece/USA 1926-

Thio-2 180mmx180mmx70mm stainless steel, neon tubes 壁面照明サイン illuminated sign No.11を参照してください。

80 ジョゼ・デ・ギマランイス ポルトガル 1939- José de Guimarães Portugal 1939-

偶像 Idol 1400x1020x615mm ceramic, mortar, steel オブジェ(見知らぬ人) object (stranger) ギマランイスは赤、黄、緑、青などのはっきりした原色を使った楽しい人間の姿をよく描きます。立川では、タイルを寄せ集めた作品をつくりました。こういうモザイクはバルセロナ生まれのミロやガウディの仕事の思い出させます。ポルトガルもバルセロナも海と空と大地の強い色の影響を受けているからかもしれません。

81 岡本敦生 日本 1952- Atsuo Okamoto Japan 1952-

黄色の種類 Kinds of Yellow 1150x2500x840mm stone, brass 車止め bollard 岡本敦生の石の作品は削れたり、切り取られながら大地とかわわっているところに特色があります。石がもともと大地から切りだされてくる。その初原の姿を想像させるのです。自然のなかから出てくる形です。今回は本葉置かれるふたつの車止めの断面に石とブロンズで板のような形をつくりました。あたかも古墳から出てきた石と真鍮のような感じですね。

82 河川龍夫 日本 1940- Tatsuo Kawaguchi Japan 1940-

関係-未来-2132年、関係-未来-2116年、関係-未来-2089年 Relation-Future 2132, Relation-Future 2116, Relation-Future 2089 810x6mm, 750x6mm, 520x6mm metal 木のつみ文字 letters tied to trees 河川龍夫は時間や物質の関係を見せようとする作家です。ここでは街に植えられた3本の木の柱にそれぞれ直径の違う3つの銅の輪をはめました。この輪はそれぞれ2089年、2116年、2132年に予定される木の幹の太さなのです。木たちがそれを見て都市のなかに移植された木の生命と未来に思いをはせ、人間自身を考えるとどういふ仕掛けになっているのです。

83 タデウス・ミスロウスキー ポーランド 1943- Tadeusz Myslowski Poland 1943-

800x250x250mm (4 pieces total) steel 車止め bollards ミスロウスキーはニューヨークにやってくる驚き、そのプラン(街の平面図)を操作した後にそこに美しい方形のユニットを見つけた。地図は世界や宇宙にまでつながるファンタジーであり、宝庫なのです。それが彼のつくった最小単位の形になりました。今回は上部が異なる4つの車止めで鉄をつくりました。世界を極端にまでつみつけた形をつくるのが彼のねらいです。

84 江上計太 日本 1951- Keita Egami Japan 1951-

2000x6mm stainless steel 換気塔 ventilation tower No.33を参照してください。

85 西塚秋 日本 1946- Masaaki Nishi Japan 1946-

廻る大木 A Huge Tree in Ascent 650x2530x650mm bronze 車止め(ベンチ) bollard (bench) ここにあるのは大木の、伏られ倒れ横たわっている姿です。それはブロンズでできていて、この街では車止めとして機能し、ある程度はベンチにもなる。西塚秋は金属の腐蝕によって時間というものを考えさせる作品をつくり、時間の遅い物質にもたらす差異が美しさを生み出すこともあり、また見る人の心の状態によって作品は変わります。作品にも人生があるのです。

86 フランシスコ・インファンテ ロシア 1943- Francisco Infante Russia 1943-

940x5000mm (ceramic tile), 740x5000mm (mirror) ceramic, stainless steel 機械搬入口 equipment loading entrance 彼は現代の機械文明と芸術を結びつけようとしています。普通は写真を使いながら、自然という画面を操作することによって思いもよらない人工と自然の調和の瞬間をつくりだすのです。彼は日蓮宗の僧侶でも新しい仕事をし続け、今もその展開をし続けている作家です。立川では、真鍮(絵を描いた板)を鏡面ステンレスに反射させることでいつもの考えを都市のなかに実現しました。

87 沈文鏡/シン・ムン・サップ 韓国 1942- Shim, Moon Seup Korea 1942-

開く Opening Up 1680x2540x600mm cast iron 車止め bollard シン・ムン・サップは素材の思ってもない特質をあらわにする作家です。今までは天然の素材-土、木、石をよく使ってきました。今回は鉄で古代の建物の一部が白日のなかにさらけられたような作品をつくりました。それは彼が物質の特性に隠された記憶を表現しようとしているからなのです。彼は木や石がそれ自体でもっている沈黙の声をきくための形態をつくりだしているのです。

88 フェリックス・ゴンザレス=トレス キューバ 1957-1996 Felix Gonzalez-Torres Cuba 1957-1996

3600x3640x300mm stainless steel, processed graphic film sheet, lighting equipment 非常階段看板 billboard on the emergency staircase トレスは、生活の場で人が身近に感じている問題意識を拡大して公共の場にもちこみ、それによって人びとに目覚めさせていることを思い起こさせたいとする作品をつくってきました。「愛」や「希望」という一見あたりまえでありながら忘れがちな問題を扱ったりするのです。立川では、永遠の時の流れを、空をとり鳥の拡大した写真(看板)を通して伝えているのです。

89 ジャウマ・フレンサ スペイン 1955- Jaume Plensa Spain 1955-

1440x460x460mm cast iron 車止め bollard プレンサは鉄そのものの形の上に、鉄による字を彫りつける作品をつくり、彼は詩人のように鉄を通して話しています。「ファール立川が美しいのは、才能あるアーティストそれぞれが、都市の生きた一部となっていることです。ひとつひとつの作品は、それぞれ異なる植物の上に広がる精神の小さな点であり、観客に対し自らを絶えず開いていく小さな質問者なのです。そこには記念碑も賛辞もありません」

90 マーティン・スーリエ アメリカ 1941- Martin Puryear USA 1941-

1670x4270x1830mm stainless steel, granite ベンチ bench プーリエは木や竹といった自然の素材を使って美しい形をつくる作家です。その形は私たちが失ってしまったしなやかな曲線と、軽やかなリズムをもっています。深く入り込んだ線と消えいようのない線がその特色となっています。プーリエのねらいは彫刻のうらに浮かぶステンレスでできた「透明な鳥」をつくることにあるのです。

91 チャールズ・ウォーゼン アメリカ 1958- Charles Worthen USA 1958-

水櫃 Water Quiver 730x465x270mm bronze 飲水栓カバー water faucet cover No.3を参照してください。

92 ゴンザロ・フォンセカ ウルグアイ 1922-1997 Gonzalo Fonseca Uruguay 1922-1997

ベマ Bema 1750x400x6mm stone 車止め bollard この作品は作家自身による、石でできた照明灯のようなものです。そこにあたって周囲を照らす光。フォンセカにとって、光とは古代から時を経て磨きつづける内なる生命の灯のようなものです。だからフォンセカの石の作品は暖かみを感じます。この仕事を頼んだ頃、彼の息子が亡くなりました。彼は半年くらい仕事ができなかった。そんなことがこの作品の背景にあります。

93 ヘンリー・ムンヤラジ ジンバブエ 1933-1998 Henry Munyaradzi Zimbabwe 1933-1998

1630x390x320mm stone 車止め bollard ムンヤラジの作品はジンバブエのシノ族に深く根付いた社会観からきています。シノ彫刻は彼が創設した流派で、自律的な芸術運動として1950年代後半に発展しました。精神的な物質のなかに現れる。魂は石において伝えられたいをあらわす、というものです。石に彫られた一本の線は、石そのものの力強さと、そこに宿る精神のありかを見せてくれます。

94 竹田康宏 日本 1959- Yasuhiro Takeda Japan 1959-

800x400x400mm stone, bronze 車止め bollard 竹田康宏は主として木材を使った作品をつくる作家です。ここからは氷河時代の記憶がよみがえってくるような時すらあるのです。作家は時代や民族性や思想をこえた人の感性に訴えかける仕事をしたいと考えています。その例として彼は「花を愛する行為」をあげ、この立川ではつぼみと題材として花、葉、実を通しての表現をしようと思ったのです。

95 トマソ・カッセルラ イタリア 1951- Tommaso Cascella Italy 1951-

1200x500x500mm bronze 車止め bollard カッセルラは細い金属を使って、深々とした空間をつくり、二次元としての線と面が三次元の空間をつくりますが、彼の場合、その面の部分をできるだけなくして立体的な空間をつくるのです。物質によってつくられる形は、形だけでなく、形以外の見え方、空間に影を及ぼすように、立体的な物質によって、形以外の振りがもたらすかどうかが重要になるのです。

96 瀧村光 日本 1948- Hikaru Yumura Japan 1948-

黒い柱 Black Pillar 1000x250x330mm grating 車止め bollard 瀧村光は石を使ってシンプルな形をつくる作家です。今回は重なる石がズレて崩れながらお互いに組み合わさった姿になっていますが、ここでは切、削、組むという彫刻の基本作業がはっきりわかるものになっています。作家のつくる形は自然のなかにあるものの発見から生まれることが多いのです。

97 瀧田友子 日本 1947- Tomoko Ushioda Japan 1947-

1280x500x250mm aluminum, stainless steel 車止め bollard 5cmの金属製の立体的なブロックで積み上げられたふたつの形は入子のような積み木構造です。ふたつの角柱の上に相似形の小さな角柱が乗っている作品は、それがまたファール立川の全体でもあり一部でもあることを想起させます。それはさらにファール立川が世界を映す鏡でありたいという考え方に繋がってくるのです。どんな一滴の露にも世界は映っているのです。

98 氏家慶二 日本 1951- Keiji Ujiei Japan 1951-

1410x250x250mm granite 車止め bollard 氏家慶二は石を使って楽しい彫刻をつくる作家ですが、広場や公園全体の計画もしています。石彫の作家は世界各地で採れる石の種類と性質をよく知っていて、仕事で各地から石をとりよせたり、時には採石場まで行って採る石を指示したりします。作家は埋まっている石のなかにすでに掘り起こすべき石の姿を見ているように。

99 ロベルト・G・ヴィラヌエヴァ フィリピン 1947-1995



Roberto G. Villanueva The Philippines 1947-1995
都市の神
Urban Deity
1200×400×500mm bronze
道祖神(車止め) guardian deity figure(bollard)
毎年10月13日開帳 Open to the public on October 13 every year
ヴィラヌエヴァは都市の近代化によって失われた固有の文化をつかみ直すために地方に移り住み、そこで他者も参加する表現活動を行ってきました。彼の作品には古代からの習慣や儀式が入ってくるのです。立川では両性具有の都市の神をつくりましたが何度も壊されました。この神である作品は毎年10月13日にご開帳される以外は閉ざりにしまわれることになりました。

100 陰里寿朗 日本 1960-



Juro Kagesato Japan 1960-
1120×400×400mm stainless steel, granite
車止め bollard
陰里寿朗は人型の顔の部分が鏡になっている作品をつくりました。彼は日常の感覚で推しながらユーモアのある彫刻をつくります。この鏡は道ゆく人が立ち止まり自分を見る鏡なのです。都市はさまざまな人たちが生きている場です。彫刻作品は見られるだけでなく、その人たちを見ているのです。日々急いで生きている人たちに、自分を見直させる装置なのです。

101 松田重仁 日本 1959-



Shigehito Matsuda Japan 1959-
1330×280×280mm bronze
車止め bollard
松田重仁は木彫りの作家です。今回の仕事でも、まず木を彫ってそれを型抜きしブロンズの作品に仕上げました。ですから木彫りのノミのあとがそのまま感じられます。ここでは作家はひとつの型をつくりました。そこにはタイムカプセルとして未来に花咲く実をつくらうとの望みがあるのです。身近なものに対する愛着は美術の動機のひとつなのです。

102 植村公雄 日本 1949-



Kimio Uemura Japan 1949-
1200×409×500mm stainless steel
車止め bollard
植村公雄はステンレスという輝きのある材料に色と形を組み合わせることで異種適合の妙のある作品をつくります。これは要素を減らすという最近の美術には珍しく、足し算の世界です。その足し算は、雲や山や川といった幼い頃の記憶によってできています。幼い頃の記憶を要素とする態度は美術の動機のひとつです。

103 リカ・ムータル オランダ 1939-



Lika Mutal The Netherlands 1939-
地中から世界へ
From Earth to the World
1180×340×180mm granite
車止め bollard
ムータルはこの御影石の彫刻で、外観は分裂していても、万物のなかにある統一という基本的原理を示そうとしました。ここでは上部は圓の輪でつながれていて、その下はふたつの割られた石によってできています。その方法は、輪をつくったあと、石の下部を割るという難しい作業によるものでした。作家はこの舗道に、家庭や美術館のようなとどまるための場所を設定したかったのです。

104 小林康彦 日本 1947-



Yasuhiko Kobayashi Japan 1947-
1150×900×200mm stainless steel
車止め bollard
小林康彦は目が錯覚するような作品をつくりました。車道側がまっただけで歩道側が少し変わった道法でできている。地上との接点が1点という不安定な形態です。作家はなにか楽しい遊びをしてやろうと考えているようです。ステンレスの作品の場合ブロンズなどのように手でつかんでつくっていくわけではないので、頭の中と図面の上での作業が多くなるかもしれません。

105 藤原吉志子 日本 1942-



Yoshiko Fujiwara Japan 1942-
ウサギとカメ
A Rabbit and a Turtle
950×500×500mm bronze
車止め bollard
藤原吉志子は金属を型にとかしこんでつくる作家です。それを鋳造(ちゅうそう)というのです。よく知られた動物や童話を、楽しい意匠をつくり形をつくる童話作家といえるでしょう。彼女にとって、子どもがよじ登り、大人が腰掛けておしゃべりして、てっぺんがピカピカする、そんなほのぼのとした嬉しなる彫刻がどかな邪魔ものとして天下の公道にあることが望ましいのです。

106 金沢健一 日本 1956-



Kenichi Kanazawa Japan 1956-
1200×300×300mm stainless steel
車止め bollard
金沢健一は鉄やステンレスの立方体の組み合わせによって、シンプルな作品をつくります。単純な方法で感動を与えることを目指す作家は多いのです。ステンレスは鉄とニッケルの合金ですが、この素材の登場は現代の空間を特徴づける輝きと軽さ、強さをもっています。現代の都市空間ではよく使われますが、それ故にそのシンプルな造形で独自の作品をつくるのに苦労するのです。

107 黒島晴男 日本 1950-



Haruo Kurotori Japan 1950-
1200×440×440mm fiberglass reinforced plastic
車止め bollard
黒島晴男はグラスファイバーを使ってシンプルな垂直の形をつくりますが、この単純な形をどれだけ美しいものとするかに作家の丹精と思想が問われているようです。作家は単にどこに置いてもよい立体をつくるのではなく、あくまで現実的な広がりをもつ空間がそこにあるという意識のなかでつくります。都市機能のものとしての美術に作家は関心があるのです。

108 レベッカ・ベルモア カナダ 1960-



Rebecca Belmore Canada 1960-
380×180×5mm stainless steel
車止め bollard
ベルモアは、カナダ先住民アニシナベの作家です。彼女の仕事にはカナダの自然とその素材を使って大地に話しかけたり、失われた民族の言葉を求めたりするものが多く、時間と土地の深い結びつきを人に知らせるのです。ここでは車止めと建物の2カ所にアニシナベ語と日本語で「私は太陽を待つ」と書かれたプレートがおかれ、それらが太陽の光を反射して重なりあいます。彼女はここで異なった世界のつながりを示そうとしたのです。

109 ヴィト・アコンチ アメリカ 1940-



Vito Acconci USA 1940-
1500×3000×600mm fiberglass reinforced plastic
車止め(ベンチ) bollard(bench)
アコンチは空間の意味をがらりと変えてしまう仕事をする作家ですが、昔はパフォーマンスをすることによって美術というものの見方や常識を変えてきました。やがてパフォーマンスの場の装置に関心が移り、ついに空間自体の空間へと向かったのです。今回は、舗道そのものが車になるという作品をつくりました。それは車社会に対する疑問にもなっているのです。



